

俺は漁師が好きだったがよ



16歳 ①

16歳だった。乗っていた第七大丸は太平洋を航行していた。

総トン数は157ト。少年が育った室戸市ではまだ木造船が多く、鋼船は珍しかった。

室戸船籍の第七大丸が神奈川県久里浜港を出港したのは1954（昭和29）年2月13日。目的地はマグロの好漁場として知られるマーシャル諸島の周辺だ。

少年の持ち場は炊事場。船長を含め二十数人分の食事を日に3度作る。操業中は夜食も加わった。

炊事係は「カシキ」と呼ばれ、新米漁師の役割だった。ほぼ1人ですべてをこなさなければならぬ。第七大丸は2人交代制。年の近い漁師と日替わりで炊事場に入った。

出航直後は積み込んだダイコンやニンジンがみそ汁の具になっ

た。1週間も経つと野菜は底をつき、ご飯と魚だけになる。真水が必要なみそ汁は朝食だけ。ご飯はおわんに切り盛りで、おかわりはできなかった。おかずは、サメが食い散らした傷物のマグロを焼いたり、煮たりした。

調味料も限られていた。しょうゆとみそはあったが、高価な砂糖はない。人工甘味料のサッカリンやズルチンが代用品だった。

全員が一度に食事をとれる場所



船員手帳の写真は中学校の制服姿だった

はなかった。へさき（船首）やとも（船尾）で食べるのが常だった。立ったままのこともあった。「朝はみんなが寝るときから起きないかん。ご飯の支度が終わったら甲板へ出て仕事。休みがない、全然。つらかったのお」

長さ100*を超えはえ縄を海中に垂らす投縄を甲板で手伝った。中学を出て間もない少年には重労働で、「仕事が遅い」とどなられることもよくあった。

それが78歳になる藤田義行の記憶だ。

藤田は37（昭和12）年、室戸市に生まれた。10人兄弟の末っ子。父は造船所を経営し、多い時は20人ほどの船大工が働いていた。

「兄貴らは造船所に行った。でも俺は漁師が好きだったがよ。漁師が一番てつとりばやかったがよ」53（昭和28）年4月、地元の中学校を卒業すると同時に漁師になった。

室戸は江戸時代から捕鯨とカツオ漁が盛んだった。明治後半になって捕鯨が廃れていくと、カツオ漁とマグロ漁が兼業で行われるよ

うになった。同級生の半分以上が漁師になるような時代だった。親戚のつてを頼り、第七大丸の兼用船で、4〜8月は三陸沖でカツオ、9〜3月は太平洋でマグロを追った。

「太平洋はね、未開地というか荒らされていないというか。どっさりとれた」

折しも藤田が漁師になった前年、サンフランシスコ講和条約が発効。連合国軍総司令部（GHQ）が45（昭和20）年に日本漁船の操業区域を規制した「マッカーサーイン」が廃止され、遠洋漁業が自由にできるようになった。戦後の食料不足の中、マグロは日本人にとって貴重なたんばく源だった。

◇ 敬称略（西村奈緒美）

米国が水爆実験を繰り返した太平洋マーシャル諸島。1954年にはビキニ環礁付近で第五福竜丸が被曝したが、周辺海域を航行していた漁船はほかにも多くあった。実験を知らず、降ってきた灰を雪だと思ひ、口に含んだ船員もいた。

それから62年。かつての船員たちは、国が健康被害の調査を放置したなどとして、国家賠償を求めて高知地裁に訴えた。往時を振り返り、いま何を思うのか。その言葉に耳を傾けた。

被曝、福竜丸だけだと思つた



南洋の雪

16歳 ②

藤田は5歳年下の善子と25歳で結婚した。遠洋漁業に出るには年に数回しか帰ってこない藤田を、息子は「おんたん」と呼んだ。善子がほっぺをつねりながら論じた。「おじさんじゃなくておとうちゃんよ」

29歳で漁労長に就任した。スピード出世だったようだ。藤田は照れくさそうに頭をかき、「マグロがよく釣れたから」と振り返る。腕前を見込まれ、全国各地の船主に引き抜かれた。

「和歌山にはマグロの遠洋船があんまりいなかったから来てくれ、と。北海道はサケとマスでもうけてたけど、だんだんとれなくなつて、船主がマグロ船に切り替えたわけ。オーナーは北海道の人

だけど、乗組員はみな高知やつた」
マグロ漁では漁労長がリーダー。時期に合わせて漁場を決め、水温を見ながらマグロのいるポイントを探して、はえ縄をおろす指示が委ねられていた。

30代後半になると、待遇も上がった。船が漁場近くの補給地に着くまで陸で待機し、旅客機で飛んで合流した。たとえば、南アフリ

カのケープタウン沖が漁場なら、藤田は南アまでは空の旅だ。帰日も寄港先から飛行機で戻れた。給与はうなぎ登りに上がった。

「マグロは景気がよかった」
室戸の町も漁船があふれ、船乗りとその家族でにぎわった。「年の暮れやいったら商店街が買い物客で歩けんばーおつて」。73歳になる善子は往時を楽しそうに思い出す。

色町も繁盛していた。「漁師たちは毎晩のように飲み歩いて、ポケットに押し込んだお金を落として行くのよ。酔うちゅうから、気付かないんでしようね。それをせつせと拾う人も結構いたのよ」

高知県の遠洋マグロはえ縄漁船は徐々に増え、最も多かった1974年には171隻を数えた。水揚げ額のピークは83年で、455億円に達した。1日あたりの単価は当時、1500〜2千円程度で推移していた。

数年経ったころ、誰かが自宅を訪ねてきた。誰だったのか、藤田ははっきりとは思いつけない。ただ、告げられた言葉だけはおぼえている。

54年の水爆実験時、第七大丸はピキニ環礁の千数百メートルの沖にいたこと、乗組員にはがんを発症して亡くなっている者もいることなどだった。

そのころ、社会科の高校教諭、山下正寿が県内の元船員を訪ね歩いてきた。宿毛市に住む山下は、米国が太平洋で水爆実験を行った時、どのくらいの船が周辺にいたかを調べていた。藤田の自宅を訪ねたのは、あるいは山下だったかもしれない。

藤田は話を聞いて驚いた。「何も知らなかった」
善子も同じだった。

「被曝したのは第五福竜丸だけだと思つていた。(藤田の)お母さんからも聞いたことがなかった」

そして、藤田は思い出した。駆け出しの甲板員だったころ、16歳のころ、太平洋から戻った第七大丸がマグロを捨てたこと、みずからも放射線測定器をあてられたこと――。

敬称略
(西村奈緒美)



1959年当時の室戸市の室津港

体にあてられたら「ガーガー」



16歳 ③

も向けられた。

「体にあてられたらガーガー鳴ってねえ、それだけは覚えちよらあ」

米国は3月1日から5月14日まで、マーシャル諸島のビキニ環礁とエニウエトク環礁で6回の水爆

実験を行った。3月1日の実験があった時、静岡県焼津港所属の遠洋マグロ漁船、第五福竜丸がその東約160キロの公海上で操業していた。

第五福竜丸の被曝が明らかになると、国は主要な港でマグロの放射能検査を行った。藤田の乗った第七大丸が東京の港に入ったのはそのさなかのことだった。

「航海中は海面近くを泳ぐシイラやカジキなんかを食べてきちよう。マグロはもちろん、毎日。そこに放射能が含んじようと港で聞いたわ。でも、危機感っていうのかな、自分も被災しているとか、同じ状況だとかいう思いは全くなかった」

藤田は、港で自らの放射線量を知らされたおぼえがない。

第七大丸は室戸に戻った。藤田たち乗組員は船を洗った。たわしに柄をつけた「ぼうずりたわし」でデッキをこしごとすった。「着るもんは水で流せ」と言わ

れた。藤田の母が川へ洗いに行った。航海中に使っていた布団も洗った。

第七大丸の船長は後に、高校生とともに聞き取り調査に訪れた高校教諭の山下正寿に語っている。マーシャル諸島で機関故障し、修理のためにウエーク島に滞在していたときのこと。米軍に頭髪と爪を切られ、体を何度も洗われた、と。

水揚げされたマグロは当時、「原爆マグロ」「原子マグロ」と呼ばれ、売り上げは激減した。研究書には、魚価の値下がりによる損害は約13億円に上ったと記されている。

室戸市では水爆実験反対のデモも起きた。室戸市が編纂した市史にはプラカードを掲げ、町を歩く背広姿の男たちの写真がある。プラカードには「死の灰 国の敵を追放しましょう」。撮影は1954年4月末となっている。

藤田には地元でデモの声を聞いた記憶はない。

「マグロの消費地は大都市。室戸で売ってたのはメジカとかサバとか。うちの口には入らん。汚染マグロは遠い世界の話やった」

|| 敬称略(西村奈緒美)

1954年3月、第七大丸はマーシャル諸島へと船を走らせていた。3日に操業を始めたが機関故障を起こし、近くの島に緊急入港している。修理が済み、島を出航。4月1日、東京の築地に入った。

港に戻ると、「ホウシヤノウ」という言葉が飛び交っていた。藤田にとって耳慣れない言葉だった。白衣姿の男たちが現れ、手には箱形の機械を持っていた。水揚げしたマグロに箱からのびた筒状のものを当てた。「ガーガー」と音が鳴るたび、マグロに印をつけていく。検査が終わると、マグロは捨てるよう命じられた。

えたいの知れない機械は船員に



1954年当時の東京の築地。水揚げされたマグロの放射能検査が行われた

俺だってもう長くない



16歳 ④

室戸市の人口は1万4千人ほど。市政発足の1959年には3万3千人だったから、今は半分以上に減ったことになる。漁船の大型化が進む中で、室戸のマグロ漁は廃れていった。

かつての喧噪がすっかりなくなった港の近くに、藤田は妻の善子と住んでいる。海までは歩いて10分ばかり。

ついこの間までは午後になると外出し、近所の仲間と雀卓を囲んでいた。近頃は勘が鈍くなったと思う。

「見切りをつけな」

最近ではテレビで映画を見ながら午後を過ごす。薄暗くなると焼酎の水割りや晩酌し、善子がこしらえたサラダや刺し身で夕食をとる。

水割りは小さなコップ3杯までと決めているが、1時間もすると

酔いがまわり、居間でごろりと寝てしまう。目が覚めるのはたいいてい午前2時ごろ。テレビを見た、新聞を読んだりしているうちに夜が明ける。

穏やかな日々だ。

ただ、心のどこかでひっかかっている。16歳のあとき、何があったのか。

自宅の居間には、新聞の切り抜きがいくつもある。62年前のビキニ水爆実験に触れ、健康不安を抱く船員の声をすくったり、日米両政府による政治決着の是非を問う

たりしている。

「もうちょっと、はよおに国が何とかしてくれたら。みんな死んだ。俺だってもう長くない」

2015年3月、県が室戸市保健福祉センターで健康相談会を開いた。米国の核実験で被曝したかもしれないと不安を感じている元船員を対象にしたものだった。

午前中は、広島から来た名誉教授など専門家3人が、放射能が人体に与える影響について講演した。50人程度の聴衆の中に、藤田の姿もあった。医学的な説明が多く、難解だった。

「ようわからん。でも、ビキニは大変な事件だったってことはわかった」

今春、元船員たちの聞き取り調査を続けていた山下が、「国家賠償請求訴訟で声を上げよう」と呼びかけた。核実験当時、ビキニ環礁の近くで操業していた船員やその遺族に向けたものだ。

3月、藤田の自宅にも、山下の仲間の高校教諭が訪ねてきた。「室戸市で説明会がある。来ませ

んか」と誘われた。

説明会では「原告参加の呼びかけ」と書かれたチラシが配られた。高知弁護士会の梶原守光弁護士が「国は第五福竜丸以外の乗組員の健康調査を放置してきた」と熱弁を振るい、迫力に圧倒された。心が揺れた。

藤田は大病を患ったこともない。原告になっていいものか。44年もの間、海の男として生き、事故と隣り合わせの人生だった。

漁労長だったころ、仲間を失った。投縄中、大しけの海にさらわれた船員は捜しても見つからなかった。機関室の事故で機関長が頭に大けがを負った。船に医者はいなかった。やむを得ず、藤田が30針縫ったが、助からなかった。船員たちはみな、海の上で生死をともしした仲間だ。

「第五福竜丸以外の船が確実に被曝していたのはわからん。でも、病気で早く死んだ人は室戸だけでもようけおる」

原告になると決めた。

「参加しないわけにはいかないと思っさ。当時のことを語れるのはもう、ごくわずかしかない」

◇ 敬称略(西村奈緒美)

南洋の雪「16歳」は今回で終わります。次回「日記」は6月に掲載の予定です。



室戸市の室津港でかつてのマグロ漁船の様子を説明する藤田義行